

欧州共通教科書『ヨーロッパの歴史』

フレデリック・ドルーシュ総合編集

(木村尚三郎監修・花上克己訳) 東京書籍刊・1996年版

A 4 版 391ページ。6800円

評者・青木利夫

「社会のすべての歴史は階級闘争の歴史である」(『共産党宣言』)と極めつけたマルクスとエンゲルス。「世界史は自由という意識の発展過程である」(『歴史哲学講義』)と考えたヘーゲル。長い人間の営みを、ひとつのイデオロギーによって一刀両断にした歴史観は、いかにも19世紀らしい壮快さでひとをうならせた。しかし、その当否は別に、こうした歴史の切りかたは事実を並べる式の学校教科書むきとはいいにくい。そこに教科書の退屈と限界があるだろう。

同時に、ハッキリしているのは、歴史というものが、書き手の拠って立つ“現在”の視点から絶えず見直され、書き改められねばならぬ宿命をもっていることだ。「すべての歴史は現代史である」ともいえる。かつて三木清は「歴史は現代を理解せしめるとともに、現在は歴史を理解せしめる」(『歴史哲学』)と書いた。とすれば、今回とりあげた『ヨーロッパの歴史』もまた、現在という視点に立つ新しい史観につらぬかれているにちがいない。それをきわめて単純に言えば、「ヨーロッパはひとつ」でありたいし、すでにそうだったのだ、ということだろう。

このことを説得力をもって述べるのは、かなり大胆な作業になる。なぜなら常識的にいえば過去何千年、「ヨーロッパはひとつ」ではなかったと思えるからだ。では、いま流行のEU=ヨーロッパ連合による統合は必要であり必然だ、というイデオロギーで強引に誘導されているのだろうか。「われわれはそんな宣伝文書を作る気は全くない」と編者は強調する。たしかに本書を読んでみれば、50万年前、ヨーロッパに最初の人類が出現してから、1990年のドイツ再統一までを、念仏のように「統一」「統合」で貫いた“進歩的”な史書ではない。むしろ予想に反して、そうした偏向を避け、拍子ぬけするほど事実を語らせようとする客観主義で貫ぬかれている。当然のことながら、これは本書のたいへん快い特色である。

しかし、特色というなら最も画期的なのは、この本が国籍を異にする12人の歴史家によって1章ずつ自国語で執筆され、それぞれを他の11人が検討、修正を加え、討議を重ね、4年がかりで完成された点だ。12人の母国は、フランス、ドイツ、デンマーク、イタリア、オランダ、ベルギー、イギリス、アイルランド、ギリシア、スペイン、ポルトガル、チェコで、各章はパリ第三大学および英国バース大学によって仏英両語に翻訳された。史上初めての、編集それ自体がヨーロッパ的な、この野心作を思い立ったのはフレデリック・ドルーシュ氏で、フランス人を父に、ノルウェー人を母とし、イギリスで生まれ育った「ヨーロッパ人」なのである。氏はみずから序文で次のように書いた。

「私は完全に一つの国に属していなかったため、しばしばイギリス人やフランス人の同級生たちから猜疑の目で見られたという体験を持っています。百年戦争、スペイン継承戦争、あるいはナポレオン戦争について、どちらの側に立てばよかったのでしょうか? こうしたナショナリズムは、いまや薄れつつあります。しかし反民主主義的目的にしばしば利用されてきた民族主義の激発や、国家主権が侵されると考えただけで一気に台頭する外国支配の恐怖と対抗するためには、

もっと考えを先に進めなければなりません。「多くの非合理的偏見は強い生命力を持ち、家族の間で親から子へ伝えられていくだけでなく、それ以上に学校で教えられる歴史のいくつかの側面をとおして、広められるのです」。そして「執筆者たちは各国史を否定するわけではありませんが、各国史を超えて、ヨーロッパの歴史的冒険をより広い視野から眺める場があるはずだということ、ともに確信しています」というのだ。

このような編集意図は、どのように具体化したのだろうか。まっさきに気づくのは、すこぶる野心的な章分けである。とくに第10、第11章など。

序章 ヨーロッパとは何か

第1章 ツンドラから神殿へ（先史時代—B.C. 4世紀）

第2章 ローマ帝国の威光（B.C. 6—A.D. 5世紀）

第3章 ビザンツ帝国と西欧世界（A.D. 6—11世紀）

第4章 中世のキリスト教世界（11—13世紀）

第5章 危機とルネサンス（14—15世紀）

第6章 新世界との出会い（15—18世紀）

第7章 宗教改革と絶対主義（16—17世紀）

第8章 啓蒙の時代と自由の思想（1700—1815年）

第9章 ヨーロッパの近代化（19世紀）

第10章 自己破壊へ向かって（1900—45年）

第11章 分裂から相互理解へ（1945—90年）

たとえば序章は、①ヨーロッパの地理学的特徴 ②言語の多様性は分裂の要因か？ ③ヨーロッパ文明か、ヨーロッパ文化か？ ④経済と社会性の結合 ⑤ヨーロッパ——その歴史についての疑問、と展開する。これを一望しただけでも、高校生に知識をたたきこむ教科書ではなく、執筆者たち自身の問題意識をぶちまけ、みずから答えを探ろうとする意欲がうかがわれよう。

逆にいえば、この本に従来のような教科書的知識の羅列を求めると、アテが外れるかもしれない。とくに、ヨーロッパの史実そのものにうとい日本人にとっては素っ気なく見える部分がある。けれども、そこに生まれ育ったヨーロッパ人、とくに小中学校で史実を習った人びとにすれば、これで十分にちがいない。たとえば、われわれがいちばん苦手とするキリスト教でいえば、イエスの登場をふくめてキリスト教とは何か、といった彼らにとって自明の部分はほとんど触れない。その代り『中世のキリスト教世界』では、さまざまな教会建築、十字架の写真、さらに「異教徒ゲルマン人をいかに改宗させたか」に関する文献まで引用して、じつに意をつくしたものになる。といっても、それぞれ決して難解なものではない。多色刷の地図を要所に配して、ヨーロッパ人の常識と関心があきらかになる。わかりきったことだが、これはヨーロッパ人による、ヨーロッパ人のための通史なのだ。

さきに「統一」「統合」と叫んでいるのではないと述べた。しかし、たとえばヨーロッパという広大な処女地へむかって、ケルト人やアラビア人、モンゴル人、ゲルマン人が次々と移動する一方、欧州側から中近東、中南米へ進出していった歴史をあらためて読み返せば、ドイツ、フランスといった一国史の枠組みでは到底おさまらず、つねにヨーロッパ史としての視野が要求されることを、つくづくと納得する。それが島国ニッポンの歴史と決定的に違うのであり、現代におけるヨーロッパ統合の必然を考えざるをえない。そういう巧まざる説得力がここにはある。

もし付け加えれば、そうしたヨーロッパ周辺の、ふかく関わった民族や地域について、もっと

書きこんでもいい、という思いにかられる。たとえばモンゴル人、アラブ人について、当時とその後の状況は当然さらに知りたくなるはずだし、たとえば『アラブが見た十字軍』(アミン・マールーフ著、1983年)のように「敵側」から鋭くヨーロッパの「侵略」を告発した本をわれわれは持っているのだ。

わたしを含めて、この本を手にする非ヨーロッパ人にとって注目点のひとつは、ヨーロッパの汚点というべき史実をどう扱っているか、であるにちがいない。たとえばスペインによるアメリカ大陸への侵略、虐殺、略奪とか、キリスト教の異端攻撃、二度にわたる世界大戦、ヒトラーのユダヤ人抹殺計画など、数えればきりが無い。

しかし、スペインを例にとると、「大発見の時代」は、それがなぜ起こったかを物欲、宣教熱、食糧難などから冷静かつ周到に記述してゆく。さまざまな航路の開拓も、貿易風や海流の詳しい図入りですこぶる客観的であり、「植民地帝国の形成」で征服者たちが「文明の偉大や神秘を解さず、財宝を略奪した」過程を明快な地図で示す。あくまで事実で語らさせる手法をくずさない。ヒトラーの台頭とその興亡もまた、彼の国会演説、ナチスの絵はがき、戦線の推移図など豊富な史料をそえて語る。英仏両国がこうしたファシズムに「戦いを挑む力がないように思われた」こと、民主主義者はファシズムと共産主義政党という「二つの対極の間で身動きがとれなく」なっていたことなどを記す。もし、この教科書を英仏はもちろん、ドイツの青少年たちが読んでも感情的な反発はほとんどなく、「あの時代」を冷静に学べるのではあるまいか。

監修者の木村尚三郎・東大名誉教授はこう指摘している。

「これまでの歴史教科書は、各国それぞれに自国の立場を正当化し、美化してきた。(中略)すべてが変わりつつあるともいえる現代のヨーロッパ史について、これほどまでに充実した内容で叙述した教科書ははじめてである。そこに私たちは、ある種の感動といったものを覚えざるをえない。それはこの本が、あくまで現代の大転換期にしっかり足をつけながら、考え、悩み、模索しつつ、歴史に自己をぶつけ、そのなかから自己を再発見しようとしているからである」。

いうまでもないが、かつて敵国だった歴史家が集まって一つの新しい歴史を書くのは、決して統合を目前にしたヨーロッパだけに委せておいてよいことではない。われわれ日本人も、かつて侵略し、植民地化したアジアの国とともに、一つの歴史書をつくる必要と必然をもっているはずだ。事実、すでに90年から92年にかけて日韓合同歴史教科書研究会が開かれている。日本側世話人をつとめた藤沢法暎・金沢大教授は「アジアは国情が大きく違うので、ヨーロッパのような共通教科書の作成は難しいものの、歴史認識をより接近させる努力は欠かせない」という(朝日新聞、96年12月9日朝刊)。日本政府もこうした共同研究を支援する民間有識者会議(代表=須之部量三、山本正、小柴政夫の各氏)をつくったが、日本の植民地支配を中心とした近現代史に研究の重点を置きたい韓国と、歴史全般を対象にしたい日本との間で、意識のギャップがあり、話し合いが難航する恐れがある(同紙11月13日夕刊)。

加えて共同研究以前に、わが国では近ごろ自由民主党の奥野誠亮・元文相ら保守派、東京大学の藤岡信勝教授ら“自由主義史観”批判派らが強い調子で戦後の教科書を攻撃、中国や韓国への侵略記述を「自虐的」だとし、ナショナリズムに立つ歴史教科書を要求している。これがすでに日韓による共同研究へブレーキをかけつつある現状を思うと、前途はけわしい。それだからこそ、ヨーロッパで「共同歴史教科書」がすでに完成し、10カ国語に翻訳され、じっさいに各国の高等学校の教室で使われはじめていることの意味、その先駆性がいっそう光ってくるのである。

(国際学部教授)